

目 次

は し が き

I 本 場	頁
1. 水産資源調査	1
(1) 漁況海況予報事業	1
(2) 沿岸重要資源委託調査	5
(3) 栽培漁業促進試験(クルマエビ稚蝦放流)	6
2. 漁場環境調査	10
(1) 沿岸漁場調査(赤潮調査)	10
(2) 渥美半島北岸(内湾部)の苦潮現象について予備的調査と考察	13
(3) 三河湾の底層における無(低)酸素水塊の発生の年傾向について	18
(4) 三河湾生態系調査	27
(5) 海況自動観測装置管理事業	27
3. 水産公害調査並に試験	57
(1) 水質汚濁への死魚の死因判定試験	57
(2) 豊川上流域におけるカワムツの水銀含有量(予備調査)	59
(3) 水産物汚染調査	67
(4) 水質監視調査	70
(5) 伊勢湾水質汚濁総合調査	72
(6) 水質調査船運航	72
(7) 水産被害調査	74
4. 沿岸・近海漁業調査	77
(1) 渥美外海漁場調査	77
(2) 具けた網漁場試験	102
(3) 源式網漁具改良試験	126
(4) 底延縄漁業試験	129
5. 藻類増殖技術試験	138
(1) ノリ生産性向上試験	138
(2) 渥美外海における褐藻類の養殖試験	151
(3) ノリ優良品種選抜試験	156

6. 水産業改良普及事業	160
7. 漁村青壮年育成対策事業	203
8. 漁民相談及び漁民研修所利用実績	205
(1) 漁民相談	205
(2) 昭和50年度漁民研修所利用実績	207
9. 各種事業関連調査	208
(1) 藻場保護水面調査	208
(2) 人工魚礁調査	211

II 尾張分場

1. 魚類増殖技術試験	217
(1) クルマエビ種苗生産研究	217
(2) ガザミ種苗生産研究	217
(3) アカガイ人工採苗試験	220
(4) かん水種苗量産化試験	221
2. 藻類養殖技術開発試験	226
(1) ノリ幼芽期の活力と病害調査	226
(2) コンプ養成試験	226
(3) モズク養殖試験	227
(4) フトモズク養殖試験	228
3. 伊勢湾・知多湾沿岸漁場調査	230
4. 水産種苗供給事業	237
(1) アワビ種苗生産	237
(2) ワカメ種苗生産	238

III 内水面分場

1. アユ種苗化技術開発試験	239
2. 養鰻技術研究	241
(1) 養成ヨーロッパウナギの雌雄の形態的差異と性比について	241
(2) ホルムアルデヒドが養魚環境に及ぼす影響に関する試験	246
(3) ヨーロッパウナギの高密度養成について	252

3. 回遊性重要資源開発試験(ウナギ種苗の安定的供給に関する試験研究)	2 5 7
(1) 生酵母がアメリカウナギの成長に及ぼす影響に関する試験	2 5 7
(2) アメリカウナギの止水式養殖試験	2 5 9
4. 内水面増殖指導調査	2 6 3
(1) 養魚指導調査	2 6 3
(2) 人工種苗アユ放流効果調査	2 6 4

(鳳 来 養 魚 場)

1. 冷水性魚類技術開発試験	2 7 1
(1) アマゴ雄親魚の電照による成熟抑制試験	2 7 1
(2) イワナの養殖および放流試験	2 7 2
2. 指 導 調 査	2 7 5
(1) アマゴ河川放流効果調査(中間報告)	2 7 5
(2) 養鱒場の環境調査	2 8 1
3. 冷水性魚類種苗供給事業	2 8 6

(弥 富 指 導 所)

1. 優良親魚育成試験	2 8 7
2. 観賞魚魚病対策試験	2 8 8
(1) 穴あき病治療に関する効果的な薬剤の使用方法について	2 8 8
(2) オキシリン酸及びクロラムフェニコール等による治療試験	2 8 9
(3) 特殊添加物餌料による飼育と魚病の予防	2 9 0
(4) 昭和50年度の金魚池の病害発生状況	2 9 2
3. 養魚環境保全調査	2 9 9
(1) 弥富地区金魚養殖用水調査	2 9 9
4. 指 導 調 査	3 1 4
(1) 弥富における金魚養殖状況	3 1 4
(2) 弥富地方のウナギ養殖状況	3 2 7

組 織 機 構

は し が き

県政に対する住民の要求は高度化・多様化しつつ、その厳しさを増しているが、県財政はオイルショック以来、税収の激減によって硬直化をきたしている。当場の予算もこれを反映し、本年度は前年対比、総額で当初予算102%、現計102%となっているが、人件費、管理費を除く試験費でみると当初予算で71.9%、現計で68.9%となっている。

こういった事情のなかで本県漁業振興の柱となっている栽培漁業を推進するための基幹施設である栽培漁業センター（仮称）が着工されるのに呼応して新規事業として種苗の放流漁場造成試験に取り組むこととした。一方、クルマエビ種苗量産化のため前年度200トン水槽2面を新設したのに続き、この水槽に見合う取水施設の改修を行い、従来の140万尾（P20）の生産を500万尾に拡大した。また、漁業者の要望、苦情に専門的にこたえる漁業相談員（嘱託1名）を設置した。更に国の指定研究として前年度まで取組んだノリ病害研究の終了を機会に県単事業としてノリの品質向上をはかるための干出効果を研究することとした。

継続事業のなかでは、ノリ中心の調査研究からその対象を拡大し、伊勢三河湾の漁場環境からは貝類の増養殖を考えるべきであるとして、アカガイの天然採苗、ホタテガイ・ヒオウギの移殖試験を行った。アカガイの天然種苗では適地、適温、適水位を、ホタテガイ・ヒオウギでは養殖適期を確認するとともに他県に劣らぬ成長率を得ている。夏期、三河湾奥部で苦潮（貧酸素水塊）発生のため大量へい死するアカガイ（平均殻長5cm）7万2千個のうち標識分千3百個を吉良、一色町沖合に移殖放流した。2日間27隻、延121名の協力を得て実施したものの、その効果を確認できないままに終わっている。また、ワカメの品種改良ということでヒロメ×ワカメの交配種を作出し、外海で養殖したところ明かに交配種と認められる形態のものが得られ、種の固定は先のことであるが将来が楽しみな結果を得ている。本県がノリ養殖を中心とする沿岸漁業県であるだけにノリの豊凶が本県漁業の経営を左右するが本年度は40年度に

次ぐ不作となり、豊橋市神野地区、蒲郡市大塚地区からノリ漁場の環境調査とその対策を要請され、調査結果とともにそれぞれ対策を指導した。加えて蒲郡市形原地区のアサリ・ノリに及ぼす木材殺虫剤の影響調査を実施した。

遠州灘冷水塊の発生により夏から冬にかけて渥美外海は高温現象を持続し、そのためか、マイワシシラス好漁、カタクチイワシシラス不漁に終わっている。三河湾では渥美湾に限らず知多湾にも苦潮が発生するようになった。水産物の汚染調査結果は幸い基準値を超えるものはなかったが、外海海藻類に重金属の蓄積が内湾より多く認められたこと、また、河川のカワムツ・オイカワにも比較的蓄積量の多いこと等、原因の究明が必要と思われる。長年継続実施されている魚礁を調査したが魚類の蝸集は認められるものの、一部には可成りの埋没が認められ、効果を減少させており、その対応を考えるべきであろう。内水面関係ではイワナの人工ふ化、飼育、放流を行った。

以上、本年度の主なる業務の内容を記したが、限られた陣容、予算でより効果的な調査研究を進めるためには一層綿密な試験計画の樹立、相互の緊密な連携、関係機関の協力が必要と考えている。幸い業界も各種業務に積極的に協力いただくムードがあり、当時はそれにこたえるべく栽培漁業の推進に向けて一層の努力を誓うものである。

昭和51年 5 月

愛知県水産試験場長 吉 見 吉 夫